

尾張における凹線紋出現の経緯

—朝日遺跡出土土器の検討から—

深澤 芳樹*

朝日遺跡61A区SK02と同60A区SD02とで出土した土器が、どちらもごく短期間に廃棄されたのであるなら、ともに凹線紋土器が出土したので、両方とも凹線紋のある時期におさまるはずである。確かにこの2つの遺構からは、凹線紋の時期になって新たに登場した土器と、それ以前から尾張で作り続けられてきた、いわば伝統的な土器とが一緒に出土した。かつて石黒立人は、前者をIV系、後者をI・II系と呼んだ(1)。ここではこの2つの遺構から出土した土器をまずIV系とI・II系の2つに分け、重点を調整法において、2つの遺構で共通する点と相違する点とを検討する。次に相違点から年代上の順番を考え、さらに共通点から朝日遺跡でIV系の成立した経緯を探ることにしたい。

SK02(以後、調査区名61A区を省く。60A区SD02についても同じ。)で出土したIV系は壺(本来は壺形土器と呼ぶべきだが、以下、「形土器」を省く。他の器形についても同じ。)824、甕810・812～814・825、高杯826・827、鉢823、SD02出土のIV系は壺844～850・852・853・855、甕856～863、高杯864、台付壺851、無頸壺854、鉢866、これ以外の土器がI系かII系にあたる。

SK02とSD02出土のIV系土器の比較 土器を観察する時には、できるだけどなたかと一緒におこなうか、もしくは最後に確認してもらうように心がけた。

ところで本稿では特にケズリを問題にする。しかもケズリの後にミガキやハケメをおこなっていて、それとわかりにくい場合が多い。そこでわた

くしがケズリをどう判断したかをまず明らかにしておきたい。もっともケズリの露出した部分があれば、ケズリの有無に関しては問題なかろう。もし完全に覆われていたら、砂粒が移動した箇所をさがす。次に砂粒の移動方向と後の調整の方向が異なっている所を見つける。そしてこれがかなりあれば、ケズリと認定する。ケズリがあるとみた個体については、砂粒が移動してできた溝の端に、砂粒の残っている箇所を5つ以上みつけて、これでケズリの方向を決めた。

なお、下端部のナデを除けば体部外面下半部の最終調整として、底部から上方向に向けて縦ハケメをおこなっていて、下からみてそのハケメが丁度放射状になった個体がある。この調整手法を、放射状縦ハケメと呼ぶことにしよう(2)。

さて壺の体部内面には、ハケメをし、それから部分的にナデる程度で、どれにもケズリの痕跡はなかった。次に残り具合のよい個体で体部下半部外面をみると、SK02-824はSD02-848・855と共通し下方向ケズリ⇒放射状縦ハケメ(3)なのに対して、SD02-844は横・上方向ケズリ⇒横ミガキであった。体部外面上半部をみると、櫛描紋のある土器は、直線紋だけで構成するものがない点、また櫛描紋の間にミガキを充填しない点で共通する。さらにSK02-824とSD02-844は直線紋と波状紋とを交互に配する点で共通するが、SD02で櫛描紋を飾る場合は、SD02-844と頸部を欠失して頸部紋様の不明なSD02-849を除けば、台付壺SD02-851を含め簾状紋が頻用される。さらにSD02には櫛描紋で飾らないもののある点、

*奈良国立文化財研究所

タタキメの観察できるもののある点で、SK02とは異なる。

では甕はどうか。SK02とSD02ではともに内面にケズリがあり、外面の体部下半部に放射状縦ハケメがある。だが、タタキメに着目すると、SK02-810では見えなかったが、SD02の甕はすべてはっきりとみえるという違いがあった。また口縁部には、SD02に刻み目のないものがあってSK02とは相違する。刻み目は、すべてハケメ具でつけているが、その位置がやや違う。SK02の場合はその位置が口唇部下端の角なのに対して、SD02の場合は口唇部面である。

高杯は、SK02-826もSD02-864もともに円板充填法で成形されており、外面は縦ハケメ、杯部内面はハケメ⇒ナデ、脚部内面はケズリのない点で共通する。ところがSD02-864の杯部外面には縦ハケメの前に上方向のケズリをおこなった痕跡が観察できるのに対し、SK02-826にはその痕跡はみつからなかった。さらにSK02-826・827の裾部内面は横ハケメなのに対して、SD02-864は丁寧な横ナデである点で異なる。

台杯壺・無頸壺・鉢については、資料数が少ないので比較できない。

このように、SK02とSD02から出土したIV系の土器をくらべると、SK02出土土器のもつ基本的な要素はSD02出土土器にみいだせるのに対して、逆にSD02出土土器のもつ要素のなかにSK02出土土器にみいだせないものがあつた。SK02とSD02は同一遺跡の生活遺構なので、この差は、遺構の性格の違いに起因するとみるより、おもに時期差に由来するとみるべきであろう。そこで今度はI・II系の土器を検討したい。

SK02のI・II系 SK02でI・II系はかなり出土しているので、土器のもつ諸要素が周辺の遺跡(4)でどんなあり方をしているか、みることにしよう。

広口壺には801~804がある。このうち所属時期

を推定するうえで804はその根拠の一端を与える。この外面には、ハケメ⇒篋描直線紋⇒ミガキの順序で調整と施紋とをおこなっている。これは、凹線紋出現前によくみられたハケメ⇒櫛描直線紋⇒篋描区画紋⇒ミガキあるいはハケメ⇒縄紋⇒篋描区画紋⇒ミガキなどの簡略型であつて、阿弥陀寺遺跡SB67・SK111・SK224・SK227、森南遺跡SK43と、いずれも凹線紋の出現前の資料にその類例がある。さらに簡略化をおし進めてハケメ⇒ミガキとした例は森南遺跡SK59下層・SD18にあつて、どちらも凹線紋土器をとまなっている。

これ以外の各要素は、凹線紋出現前からあつて後におよぶ。すなわち804の体部内面は横・斜上方向にケズリをしているが、これは阿弥陀寺遺跡SB19・SK74・SK151・SK181・SB33・SK23などごくまれにある手法である。801と804の口縁唇部はハケメ具による刻み目がある。これは阿弥陀寺遺跡SB31・SK181・SK61・SK183・SK03、町田遺跡SD03、勝川遺跡SD60中層にある。801の頸部には篋状工具による沈線紋がある。これは阿弥陀寺遺跡SB31・SK181・SD04・SB33・SK03・SK120・SK221・SD18・SD03、町田遺跡SD03、森南遺跡G溝Ⅷ層、大瀧遺跡SB12にある。801の口縁部内面の浮紋は阿弥陀寺遺跡SK297・NR02・SB12・SB71・SD18・SD03・SZ03・SD02、森南遺跡SB05・G溝Ⅷ層・SK69に類例がある。803の頸部は無紋、802は貼付突帯⇒刻み目である。貼付突帯⇒刻み目の類例は、阿弥陀寺遺跡SD04・SK230・SD18・SD02・SB04上層、森南遺跡SK59下層にある。なおこれはSD02-846の刻み目のない貼付突帯とは系譜が異なる。

細頸壺805~807のうち806・807にみられる櫛描紋の間のミガキは、凹線紋出現以前にこの地域でごく一般的であつたが、凹線紋の採用とともに急速に失われた手法である。ほかの要素は凹線紋出

現前からあって後におよぶ。つまり805の類例は阿弥陀寺遺跡S B67・S D19にある。806・807の例は阿弥陀寺遺跡S K757・S D18・S D19にある。

壺の体部の紋様には、櫛描紋と篋描紋とがある。817は櫛描直線紋⇒反転部櫛描紋⇒ミガキの工程からミガキをはふいたもので、阿弥陀寺遺跡S D18・S B40・S D19・S K262と、凹線紋の出現前から後におよぶ。縦ハケ後に短線を多条に描く818～821の紋様の類例は阿弥陀寺遺跡S B61・S B67・S B71・S K06・S K37・S D22・S D18にあり、これも凹線紋の出現前から後におよぶ。

甕の809と811にはケズリはみられない。外面は、下から上に順次ハケメをしている。809の口縁部は上下から指でつまんで、これをつらねている。この手法は、阿弥陀寺遺跡S K61・S B12・S B14・S B33・S B67・S B68・S K98・S D01・S D18・S D19・S B04上層・S K29、森南遺跡G溝Ⅷ層にある。この口縁部の処理の仕方は凹線紋の波及前に特に盛行した。822は条痕紋土器で、この類例は阿弥陀寺遺跡S K314・S K298・S K29、森南遺跡S K43・G溝Ⅷ層にあり凹線紋の出現前から後におよぶ。

S K02とS D02の位置づけ 朝日遺跡S K02から出土したI・II系の土器群のもつ特徴を備えたものを朝日遺跡以外にもとめると、阿弥陀寺遺跡S B14・S B33・S B61・S B67・S K06・S K135・S D01・S D22・S D02・S B04上層、森南遺跡G溝Ⅷ層といった資料を挙げることができる。これにS K02出土土器自体の検討結果をつき合わせると、朝日遺跡S K02出土の土器群は凹線紋の導入期、すなわちIV系が成立したかなり早い段階に位置づけることができよう。

他方朝日遺跡S D02出土のI・II系は数が少ないので、比較検討ができない。だがこの土器群に近いものとして、阿弥陀寺遺跡S B40出土土器を挙げることができる。ここから出土した三河の在

地型の壺は、肩部が大きく張り、紋様が簡略で、凹線紋のある時期のなかでも新しい特徴を有している。だからS D02の出土土器はS K02より年代的に遅れるはずである。

したがって、S K02のそれを尾張が凹線紋を受け入れた時期、つまりIV系の導入期、S D02を凹線紋を頻用し、IV系が定着して導入時点とは異なった様相が発現した時期、つまりその盛行期に位置づけることができる。

ところでS K02出土の高杯826においては、ケズリの痕跡を確認することはできなかった。しかし高杯の場合、もしケズリをおこなうとすれば、杯部は外面、裾部は外面にケズリのある場合もあるが、基本的には内面である。このうち裾部内面ケズリは最終調整だが、杯部外面のケズリの後にはミガキやハケメをすることが多いので、たとえケズリをおこなっていても観察できないことも充分ありえよう。そこでS K02出土の826の杯部外面にケズリ痕をみつけることはできなかったが、基本的に同一形態であるS D02出土の高杯864のあり方を参考にして、S K02-826の杯部外面にもケズリ調整がなされているとみておきたい。

ここで導入時点から盛行時点にみられた調整法について、再確認しておきたい。IV系で導入期から盛行期におよぶ要素をまず挙げよう。壺の外面は下方向ケズリ⇒放射状縦ハケメ：内面はハケメ(⇒ナデ)、次に甕の外面はハケメ⇒放射状縦ハケメ：内面はハケメ⇒上方向ケズリ、高杯の外面は上方向ケズリ⇒ハケメ：杯部内面はハケメ⇒ナデ、脚部内面はハケメまたはナデであった。この他の器形はこれらの調整法のどれかにあてはまる。なおこのあり方は朝日遺跡89A区S K68出土土器にもよくあてはまる。また導入期になく盛行期に現われたのは、壺の調整で外面が横・上方向ケズリ⇒ミガキ：内面がハケメ(⇒ナデ)、櫛描紋に簾状紋のあること、壺・甕でタタキメがみえること、

甕の口縁部は無紋か、刻み目があれば口唇部にあることなどである。これらの盛行期にみられた諸要素が導入期からはたしてどの程度遅れるか、その位置づけなどは今後の課題である。

尾張で朝日遺跡 S K 02・S D 02の観察結果が一般なこと ところで加藤安信らは1982年に刊行された朝日遺跡の報告書(5)で、壺の体部外面下半部にケズリ調整がなされている事実を指摘した。石黒は1990年に刊行された阿弥陀寺遺跡の報告書で細頸壺はケズリ⇒ハケメの順番で調整されていること(6)、同年石黒はこの手法がIV系の壺一般で通例であると発表した(7)。甕の内外面の調整については、1982年の朝日遺跡の報告書で加藤らは、ほぼ完全な観察結果を公表した。また高杯の調整法については、外面にケズリのある例を、石黒は阿弥陀寺遺跡の報告書で記述した。このように今回の観察結果は、加藤や石黒らによって進められてきた一連の研究に1部追加したうえで、基本的にそれを追認することになった。

そしてこの点こそ、今回の観察結果が尾張にひろくあてはまる可能性を示唆する。そこで海部郡甚目寺町大淵遺跡 S E 03・同阿弥陀寺遺跡 S B 40・春日井市勝川遺跡 S D 60・S X 01の遺構から出土した土器を観察してみた(8)。その結果、朝日遺跡 S K 02と S D 02とで共通したIV系における調整法の使い分けが、これらの遺構から出土した土器に確かにみとめられたので、朝日遺跡 S K 02・S D 02から出土したIV系土器に共通する特徴は尾張に面的にひろまっていたと判断してよいだろう。

尾張におけるIV系のなりたち では次に調整法の観点から、尾張におけるIV系のなりたちについて考えてみたい。なお高杯杯部外面のケズリの方については、朝日遺跡以外の高杯を観察する時、その方向に細心でなかったため、ケズリの方については上か下かを問わないこととする。

さて凹線紋が出現する前の資料としては、近江

(9)(針江南遺跡暗茶褐色粘質土層、服部遺跡 M 015・017・019～021・028・032・035・038・052・063・085・106・108・329・334・340・342・387)、美濃(10)(牧野小山遺跡 Y 7号住居址)、尾張(11)(阿弥陀寺遺跡 S B 56・S K 74・S B 12・S B 67)、伊勢(12)(東庄内 B 遺跡 S K 94・S B 26・方形周溝、花ノ木遺跡 S B 45・S K 23)出土土器をみた。

そして高杯を除く壺と甕において、以下の点を確かめた。すなわち放射状縦ハケメは1例もないこと、ケズリは、壺の内面に横あるいは斜方向か、壺や甕の外面体部下半部最下段に横方向に幅約1センチ帯状にあるかのどちらかで、いずれの場合もごくまれであったことである。つまり壺の体部外面は、まず下半部と上半部に縦ハケメをした後に、体部最大径部に横あるいは斜ハケメをし、丁寧な場合は次にミガキをほどこす、甕の場合は、体部下半部の下端から上へすこしずつ縦ハケメをおこなっていく、内面は壺も甕もハケメ⇒ナデが一般であった。これらの観察結果から、近江・尾張・伊勢においては、尾張のIV系でみたケズリ手法と放射状縦ハケメ手法は明らかに新来の要素であったと判断して誤りなからう。

さて凹線紋が出現した後の資料としては、次の土器をみた。

伯耆 (13)(後中尾遺跡)

因幡 (14)(岩吉遺跡 S K-81・83・89・91・S D-37、万代寺遺跡第51区溝1・第53区土壇1～3・溝2・第54区土壇5)

美作 (15)(京免・竹ノ下遺跡 S K 186b、一貫西遺跡住居址3・4・溝状遺構、西吉田遺跡住居址3・4・10・土壇墓4、金井別所遺跡住居址2)

備前 (16)(鹿田遺跡竪穴住居-1・井戸-1・土壇64・117・192・234・254・318、今谷遺跡土壇-24・35・49・溝-2・14・建物-22)

播磨 (17)(周世入相遺跡土壇30、新宮・宮内遺跡Ⅱ-4坪・Ⅱ-3坪暗茶褐色細砂混り土層・H-

28坪・B-2坪・B-4坪、播磨八幡遺跡土坑4・6・9・10、大垣内遺跡溝3、市ノ郷遺跡土坑、八代深田遺跡)

讃岐 (18) (彼ノ宗遺跡ST-19、烏帽子山遺跡、久米池南遺跡第2・3号テラス状遺構・第1号土坑)

阿波 (19) (光勝院寺内遺跡、名東遺跡方形周溝墓SX04・1号・2号方形周溝墓・土坑SK06・SK15・竪穴住居跡SA02・方形周溝墓SL18)

淡路 (20) (下内膳遺跡、森遺跡竪穴住居址11・12)

丹後 (21) (橋爪遺跡SD21IV層、奈良谷遺跡溝、志高遺跡1号墓・SX86231・自然流路に伴う落ち込み部・SK85201・85206・85207・85212・SH86201・86203・86204、寺川遺跡SD28、須代遺跡1号・2号住居・溝4)

但馬 (22) (米里遺跡SK04、仲田遺跡I次調査溝状遺構、女代神社遺跡)

丹波 (23) (興遺跡SX01・SK07・08・19・33・SD01~03、青野西遺跡1・3・4・6号周溝墓、春日・七日市遺跡SD32・旧河道1、美月遺跡SD17、千代川遺跡方形周溝墓1・2・SD06、ケシヶ谷遺跡SX134、SH102・135、SD74・103、茶白山遺跡、青野遺跡SD87909)

摂津 (24) (奈カリ与遺跡、栄根遺跡方形周溝墓1・土坑5、原田西遺跡方形周溝墓、東奈良遺跡自然水路、多能遺跡第9・10・20号墓、新免遺跡方形周溝墓)

山城 (25) (神足遺跡、上里遺跡溝SD4804、長刀鉾町遺跡弥生溝2・3、鳥羽離宮跡溝、大畠遺跡SD0107、森山遺跡SX12)

河内 (26) (田口山遺跡、雁屋遺跡、加美遺跡中期方形周溝墓、城山遺跡1・3・4・6・7・16・17・19・23・29号方形周溝墓、国府遺跡土坑3、川北遺跡弥生中期土器群、星丘西遺跡、瓜生堂遺跡第2・5・6・7・9・10・13・14・15号方形

周溝墓、亀井遺跡1号方形周溝墓、成法寺遺跡方形周溝墓、喜志遺跡土器棺)

和泉 (27) (池田下遺跡方形周溝墓1~3・溝6・7、池上遺跡、四ツ池遺跡、万町北遺跡ST002・周溝墓)

紀伊 (28) (宇田森遺跡A溝、吉田遺跡、太田・黒田遺跡井戸11)

大和 (29) (唐古・鍵遺跡北方砂層、四分遺跡SE1481・610・809・SD670、大貝ヒジキ山遺跡、宮滝遺跡)

伊賀 (30) (下郡遺跡SD30、北切遺跡SX11周溝・方形周溝墓SX1、御所垣内遺跡SB4、下川原遺跡SK7)

若狭 (31) (大鳥羽遺跡)

近江 (32) (高田館遺跡方形周溝墓、大辰巳遺跡溝状遺構、法勝寺遺跡SDX1・7、肥田西遺跡、服部遺跡M002・004~008・010~012・396・398・400・405・407・409・410・413・420~424・426・430・433・435、下之郷遺跡環濠、弘川遺跡方形周溝墓、横枕遺跡SD-1)

美濃 (33) (一本松遺跡、日野遺跡土坑SK06)

伊勢 (34) (平戸山遺跡土坑、上野遺跡SB01・06・09~11・14・17・22・SD01、沖ノ坂遺跡、中尾山遺跡、橋垣内遺跡方形周溝墓1・土坑18・旧河道4、納所遺跡SK1・4・SD12、亀井遺跡SK1・2、鳥居本遺跡SX1・2・SK3・13・34・35・42・62、涌早崎遺跡SH4・8・10・16・SK23・24、射原垣内遺跡、波瀬B遺跡SX1~3、起A遺跡SB5)

三河 (35) (岡島遺跡SX02・03・SK09・SD21・25、東光寺遺跡SB05、森岡遺跡SB08~10、橋良遺跡)

加賀 (36) (戸水B遺跡第4・5次調査第3・8・10号土坑・第10号溝・第6次・7次調査土坑・溝)

能登 (37) (山王丸山遺跡、柴垣須田遺跡土坑状

遺構・3号・4号住居址、細口源田山遺跡第1・8・10・23号方形周溝墓、藤野遺跡S B01・04・07・S X06・07)

この観察結果をもとにして、主体を占めるとみた調整法を遺跡ごとにドットしたのが、図1である(38)。これに次ぐ調整法がかなり高い比率なら、これも図にいれることにした。なお高杯脚部内面のケズリは、大多数が右回転であった。

図1によれば、壺で、尾張の調整法が主体を占めていたのは、若狭・近江・美濃・三河の地域である(写真1-1)。これ以外の備前から三河までの地域では、近江を含めて伊賀や伊勢にケズリをおこなわないハケメ仕上げの壺があったが、これを除けば、外面の最終調整はミガキが一般である。ケズリには、内面か外面かで2種類ある。内面ケズリは備前・讃岐・阿波から中国地方の一部で主体的である。他方外面ケズリ⇒ミガキの手法は1部で重複しながらも、基本的に内面ケズリ地域の北・東側に分布する。このケズリには3種類がある。まず上方向にケズリをするのが、淡路・摂津・山城・河内・和泉・紀伊・大和の地域である(写

真1-2)。伊勢は横方向と上方向のケズリを組み合わせていた。そして残りの地域では、下方向にケズリをおこなう。これらのうち尾張の調整法と最も近縁なのは、ケズリが体部外面下半部にある、下方向のものである。近江や尾張の凹線紋出現前にはIV系に特徴的なケズリや放射状縦ハケメはなかったのに、この地域のIV系は外来の要素を受け入れて成立したはずである。したがって西にひろまっていた下方向ケズリ⇒ミガキのミガキを放射状縦ハケメに換えたものが、尾張一帯の調整法の蓋然性が高い。そうであるなら、その変換はミガキの地域に近い若狭あたりでなされた可能性がきわめて高いことになる。この手法は、近江・美濃を経て尾張に達したはずである。なお丹後奈具谷遺跡で出土した壺には、体部外面にケズリ痕をみつけることはできなかった(39)が、周辺のあり方と壺の特徴を勘案すると、丁寧なミガキのしたにケズリが覆い隠されている公算が高いと考える。これに対して、伊勢に主体的に分布する横・上方向ケズリ⇒ミガキ手法は、単に上方向のケズリの存在やミガキといった点ばかりでなく、ミガキの後に体部最下部を1センチぐらいナデると

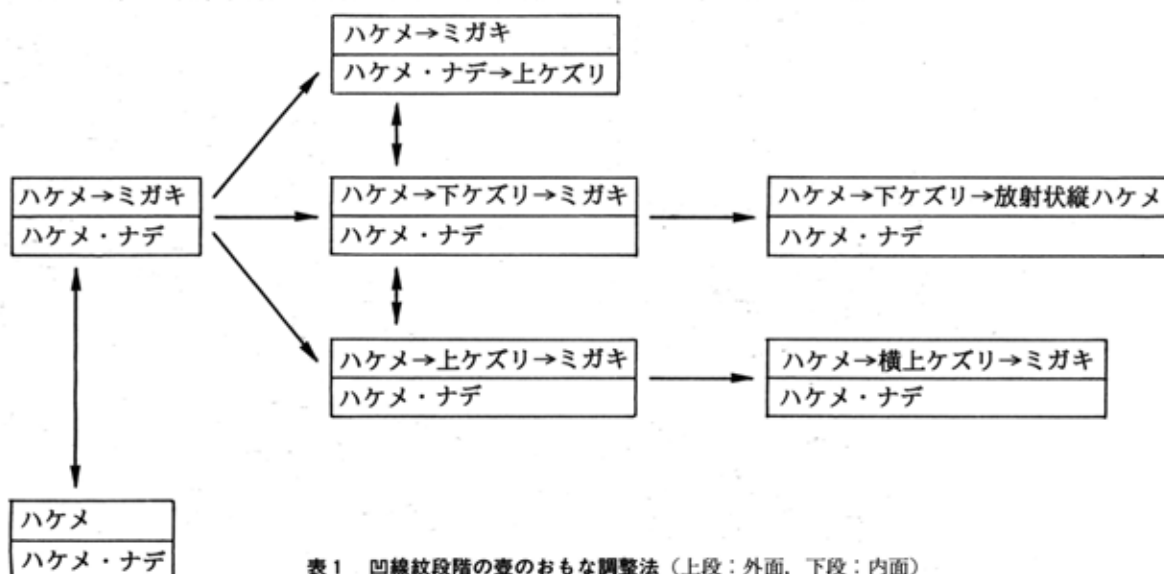


表1 凹線紋段階の壺のおもな調整法(上段:外面, 下段:内面)

いう細かな点も、大和や山城などの畿内地方と共通する。だから伊勢湾岸におよんだIV系には、おおきく若狭⇒近江⇒美濃⇒尾張と山城・大和⇒伊賀⇒伊勢といった2つの異なった経路があったことを、壺の調整法のあり方から想定することができる。

では畿ではどうか。尾張の調整法が主体的なのは、丹後・若狭・近江・美濃である。この他の調整法には、外面の最終調整がミガキのものとハケメのものとがある。ミガキをおこなったものには、ケズリが内面か外面かでさらに2種類ある。まず外面ミガキのうち内面ケズリなのは、但馬・摂津以西の中国地方と四国地方とである。これに対して外面ケズリは、淡路・摂津・山城・河内・和泉・紀伊・大和である。なおこの地域のケズリ方は

上方向なので、この地域の壺のケズリ方と一致する(40)。

以上の外面ミガキの地域のほかに外面の最終調整がハケメの地域がある。このハケメには、2種類ある。一つは下からすこしずつハケメをしていて体部外面の調整を終えるもの、もう一つは放射状縦ハケメで終えるものとである。前者の手法には近江・伊賀・伊勢などの1部に分布し、ケズリをおこなわないものと、丹波と摂津の1部に分布し、内面ケズリをおこなうものがある。他方後者の放射状縦ハケメの手法は尾張の調整法の地域、すなわち丹後・若狭・近江・美濃はもちろんのこと、このほかに伊賀と伊勢の一部にも分布している。このうち伊賀・伊勢に分布する手法は、外面上方向ケズリ⇒放射状縦ハケメと、やや特異であ

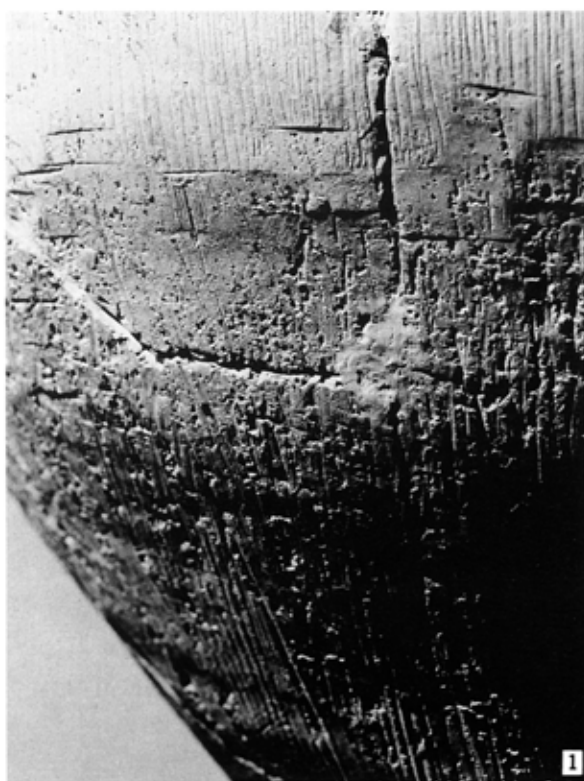


写真1 壺体部下半部外面の調整法2種 (1. 近江彦根市肥田西遺跡 2. 大和橿原市四分遺跡)

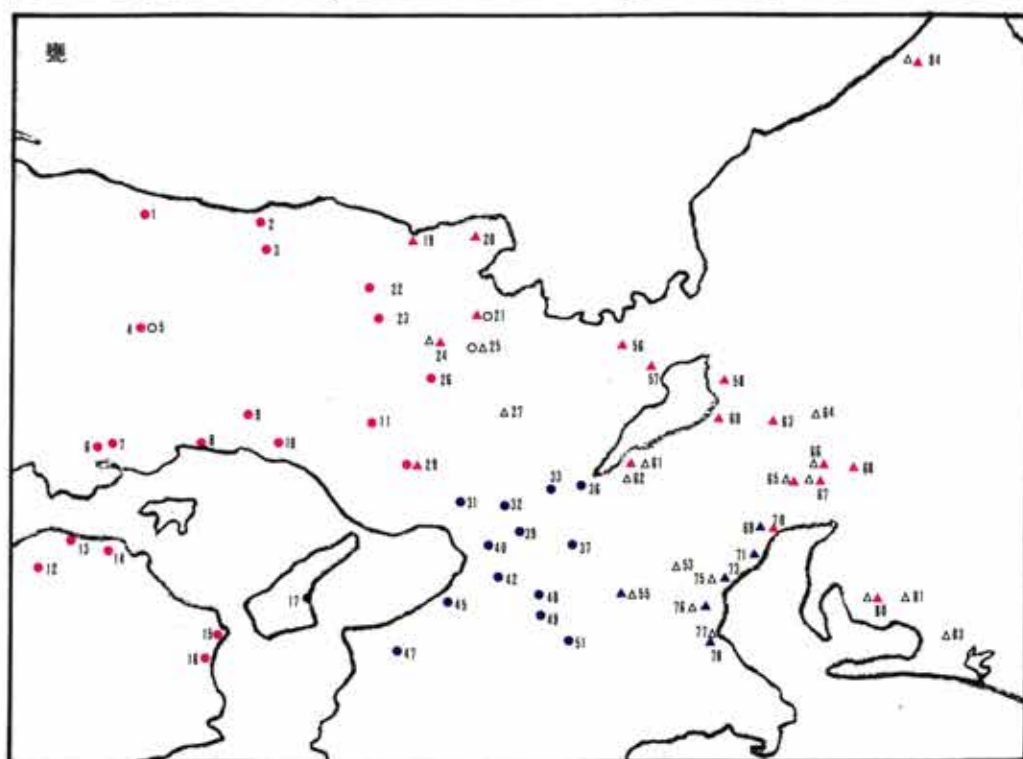
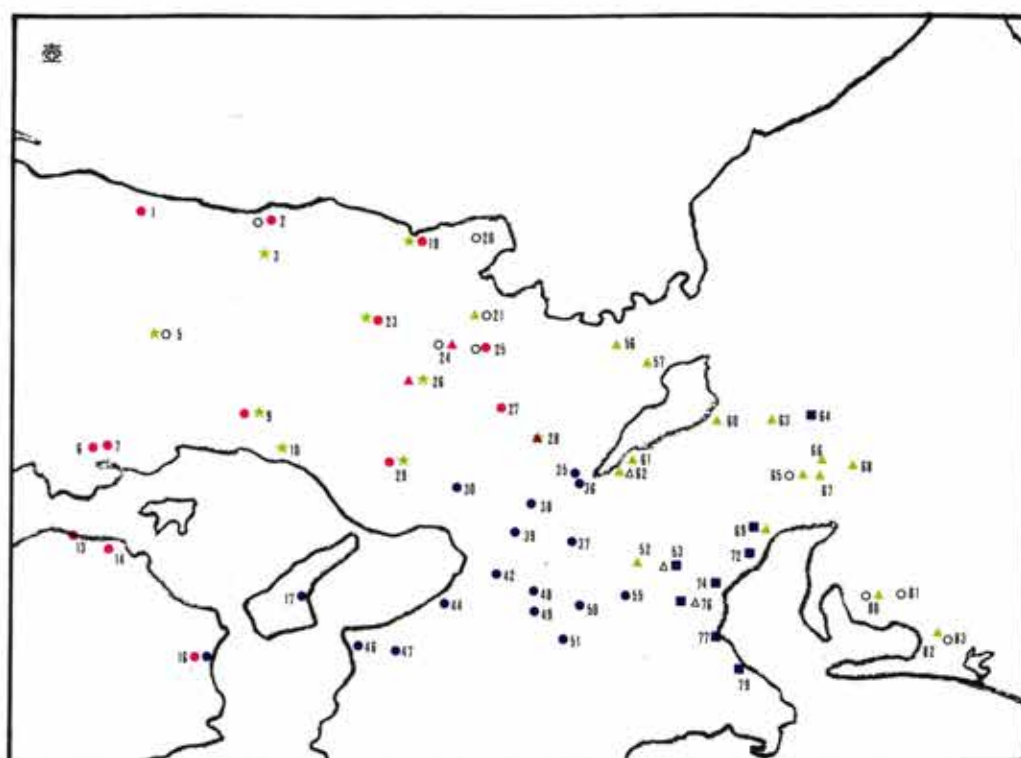
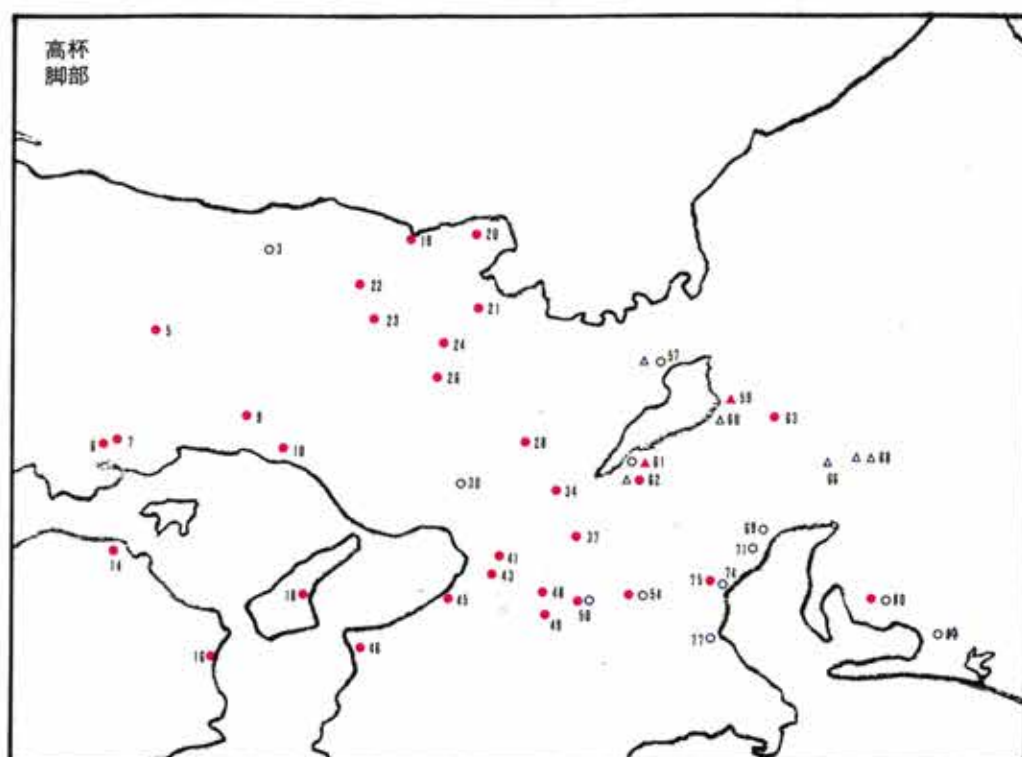
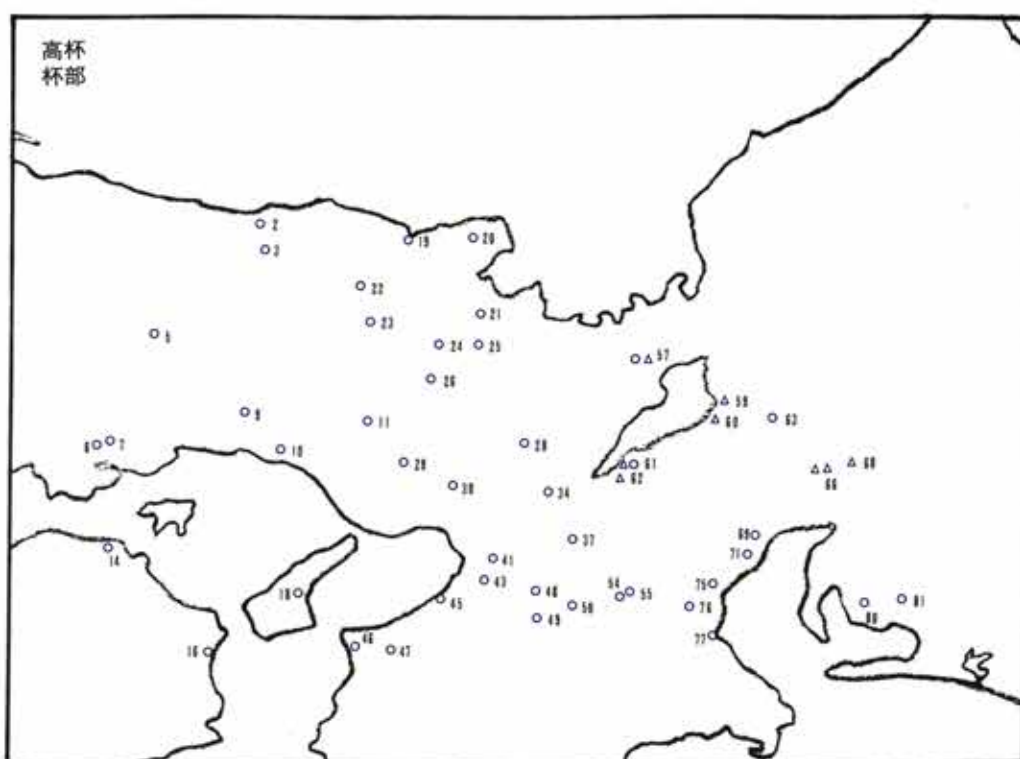


図1 凹線紋段階の調整法

- | | | | |
|---------------------|-----------------|---------------|-----------------|
| ● 外面ミガキ | ● 外面上ケズリ⇒ミガキ | ■ 外面横上ケズリ⇒ミガキ | ★ 外面下ケズリ⇒ミガキ |
| ○ 内面ケズリ | ● 内面ハケメ・ナデ | ■ 内面ハケメ・ナデ | ○ 内面ハケメ・ナデ |
| ▲ 外面ハケメ (放射線ハケメを含む) | ▲ 外面上ケズリ⇒放射線ハケメ | | ▲ 外面下ケズリ⇒放射線ハケメ |
| ○ 内面ケズリ | ○ 内面ハケメ・ナデ | | ○ 内面ハケメ・ナデ |



- | | |
|---------------|----------|
| ○外面縦ケズリ ➡ ミガキ | ○外面ミガキ |
| 内面ハケメ・ナデ・ミガキ | 内面ハケメ・ナデ |
| △外面縦ケズリ ➡ ハケメ | △外面ハケメ |
| 内面ハケメ・ナデ・ミガキ | 内面ハケメ・ナデ |

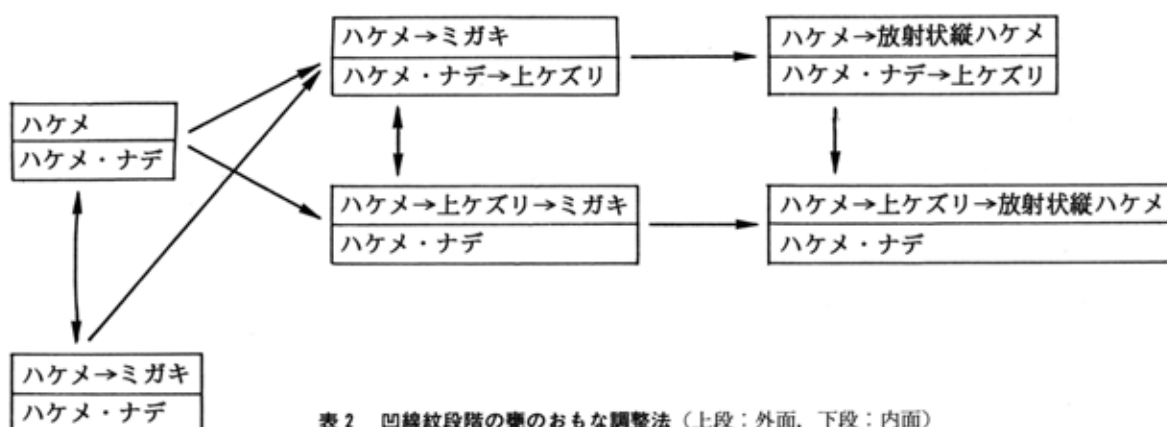


表2 凹線紋段階の襲のおもな調整法（上段：外面，下段：内面）

る。この手法でケズリの位置と方向に着目すれば大和や山城などの畿内地方の襲に一致し、他方放射状縦ハケメに着目すれば尾張などの調整法と共通する。つまり上方向ケズリ⇒放射状縦ハケメの手法は、山城・大和などの要素と尾張などに分布する要素が組み合わさっているのである。凹線紋の出現前の伊勢には、出現後にみるような外面ケズリがなかったことを考慮すれば、分布状態と変化のあり方とから、この調整法は基本的に、山城・大和から外面のケズリが東進し、近江から放射状縦ハケメが南進して、伊賀あたりで組み合わさって成立したとみてまず間違いなからう。

これに対して尾張一帯に分布する調整法はどうだろうか。ケズリは内面上方向で、但馬以西・以南の地域に共通する。問題なのは、外面のミガキとハケメの違いである。丹後以东のハケメは、まず外面全面に下から少しずつハケメをしていって口縁部に達した後、最後に放射状縦ハケメを加えたものである。この両地域のミガキと放射状縦ハケメは、最下段のナデを除けば、ともに外面の最終調整であること、さらに放射状縦ハケメは通例のハケメより長く、調整範囲がミガキのおよぶ範囲にはほぼ一致しているという共通性がある。この事実を重視すれば、調整法の違いは調整具の違いで説明できる。したがって、凹線紋出現前の近江・尾張のあり方を考慮して、その分布状態と変化

のあり方から、襲においてミガキ具をハケメ具に持ち換えるのが丹後あたりでなされたとみてまず誤りなからう。伊勢湾岸におよんだIV系の襲には、おおきく丹後⇒若狹⇒近江⇒美濃⇒尾張と、山城・大和からと近江からの手法が伊賀におよんでこれが合成されて伊賀⇒伊勢へといった南北2つの異なった経路があったことを、襲の調整法のあり方からよみとることができる。

高杯はどうだろう。高杯は杯部と脚部とからなるので、この2つに分けて、検討したい。

杯部の外面には、ほとんどすべてにケズリがある。このケズリの後には大抵、ミガキかハケメの工程がくる。ミガキについては、備前から三河の全域にひろく分布する。一方、ケズリ⇒ハケメの手法は、近江・尾張と分布域に片寄りがある。

脚部の内面には、ケズリのあるものとないものの2種類がある。ケズリのあるものは、備前から三河に分布するのに対して、ケズリのないのは因幡・近江・尾張に集中して分布する。この分布のあり方は、外面のミガキとハケメのあり方によく似ている。

高杯の調整法については、近江あたりで外面のミガキをハケメに置き換えて、これが美濃⇒尾張におよんだとみるのが最も無理のない解釈であろう。しかしこの変換は、ミガキの分布状況からみると、不完全であつたらしい。

1. 後中尾 2. 岩吉 3. 万代寺 4. 京免・竹ノ下 5. 一貫西 6. 鹿田 7. 今谷 8. 周世入相 9. 新宮・宮内
10. 播磨八幡 11. 大垣内 12. 彼の宗 13. 鳥帽子山 14. 久米池南 15. 光勝院寺内 16. 名東 17. 下内膳 18. 森
19. 橋爪 20. 奈良谷 21. 志高 22. 米里 23. 仲田 24. 興 25. 青野西 26. 春日・七日市 27. 美月 28. 千代川
29. 奈カリ与 30. 栄根 31. 原田西 32. 東奈良 33. 神足 34. 上里 35. 長刀鋒町 36. 鳥羽 37. 大島 38. 田口山
39. 雁屋 40. 加美 41. 城山 42. 国府 43. 川北 44. 池田下 45. 池上 46. 宇田森 47. 吉田 48. 唐古・鍵 49. 四分
50. 大貝ヒジキ山 51. 宮滝 52. 下郡 53. 北切 54. 御所垣内 55. 下川原 56. 大島羽 57. 高田館 58. 大辰巳
59. 法勝寺 60. 肥田西 61. 服部 62. 下之郷 63. 一本松 64. 日野 65. 大瀬 66. 朝日 67. 阿弥陀寺 68. 勝川
69. 平戸山 70. 上野 71. 沖ノ坂 72. 中尾山 73. 橋垣内 74. 納所 75. 亀井 76. 鳥居本 77. 涌早崎 78. 射原垣内
79. 波瀬B 80. 岡島 81. 東光寺 82. 森岡 83. 橋良 84. 戸水B

IV系における規範 ともあれ凹線紋導入期に尾張に現われたIV系の土器は、器形差を越えて、すべての器形でミガキをもちいずに、ハケメで終えるのを原則としていた。壺や甕といった底部が平底の土器では、体部下半部外面は放射状縦ハケメとする。あるいはハケメ具の使い方という点で、高杯の外面のハケメさえも、基本的にこの放射状縦ハケメと同類の手法とみなすことができる。

放射状縦ハケメやこの同類のハケメをする器形では、ハケメとケズリを組み合わせて調整していた。そしてケズリの方向をみると、壺は外面に下方向の、甕は内面に上方向の、高杯は杯部の外面に縦方向のケズリがというように、それぞれの器形で作り分けていた。

どの工程でどの調整をどうおこなうかは、調整具の選択と、土器をどう据えて、体をどんな格好でどう動かすか、つまり身体技法とにかかっている。おそらくケズリの方向など、後世の人がループでもなければみわけにくいような差が現に規範化されているという背景には、身体技法そのものが人目につくような行為であったことと、人目につく状況下で実際に土器が作られていたことの2点があると思われる。

尾張における凹線紋の成立 調整法に主眼をおいて、凹線紋の普及した時期の備前から三河までの土器をみると、調整法の種類は実は少ないのに、器形によって調整位置の違いとその組み合わせ方の違いとで様々な地域的な差異を形成していた。

わたくしは、尾張で石黒が定義して設定したIV系の土器を観察し器形ごとに調整法のあり方をみた。その結果基本的に加藤や石黒らの観察結果を追認し、ケズリの方向と放射状縦ハケメの視点をこれに加えた。その観察結果を備前から三河までの地域差の地図にあてると、尾張にひろまった調整法の祖型は、畿内地方を含まない近畿地方の北・西部ないし以西にあった。それは、体部外面で

最下段におこなうナデを除けば、あらゆる器形で最終調整がミガキであって、かつケズリを頻用する、ケズリの方向は、壺が外面を上から下に、甕が内面を上、高杯杯部が外面を縦に、裾部がもし削るなら内面を横にという規範にしたがって土器を作っていた地域である。

尾張の壺は若狹あたりで変化しこれが近江・美濃をぬけて尾張に達した、尾張の甕は丹後あたりで変化しこれが若狹・近江・美濃をぬけて尾張に達した、また尾張の高杯は近江あたりで変化しこれが美濃をぬけて尾張に達したと理解すべき状況であった。しかもそれぞれの器形で起こった変化は、ミガキをおこなうべき工程で、ミガキをおこなうべきなのに、基本的にその工程で、ハケメをおこなったために起きた変化であった。つまりミガキ具をハケメ具に持ち換えた変化が起こっていたのである。この変化は同一場所で一気になされたものではなかったらしい。甕は丹後あたりで、壺は若狹あたりで、高杯は近江あたりでなされていたとみた。同一内容の変化が地域をすこしづつかえて、いわば連鎖反応的に起こったのである。しかも丹後あたりで起きた甕の変化は若狹以東においても維持されており、若狹あたりで起きた壺の変化は近江以東においても維持されており、近江あたりで起きた高杯の変化は美濃以東においても維持されている。つまり変化した内容が東に行くにしたがって次第に累積していったのである。それは丹後あたりでうみだされた放射状縦ハケメの発想が、あらゆる器形にわたって徹底されていった道程であったと捉えることもできる。他方伊勢ではどうだったろうか。壺や甕は大和や山城などの畿内地方の要素を共有し、壺は伊勢においてやや変化しており、甕は伊賀において近江の要素と合成して成立したものが伊勢に達していた。壺でみたように決してハケメ化の徹底された道程ではなかったのである。だから伊勢におよんだ調

整法は、尾張のそれとは異なった原理で形成されたものであったとみなすことができる。だから尾張で凹線紋期に新たに登場した土器の作り方は、伊勢経由で伝達されたというのはいりえない話である。いいかえると、土器の調整法のあり方でみる限り、尾張で起きた凹線紋導入期の変革に、直接、かつ深く関与したのは、畿内地方ではなく、近江を介しての日本海側地域であったと結論されるのである。

本稿をまとめるにあたっては、赤澤徳明、秋枝芳、網伸也、石神幸子、石黒立人、泉雄二、井上直夫、芋本隆裕、岩崎誠、上村安生、宇治田和生、梅川光隆、浦上雅史、大野左千夫、大山真充、岡内三真、奥井哲秀、加古千恵子、春日井恒、勝浦康守、加藤安信、門田了三、可児光生、兼康保明、河北秀実、川越俊一、川西宏幸、岸岡貴英、木村泰彦、倉田直純、小浜成、小林久彦、阪田育功、笹川龍一、佐藤晃一、篠宮正、清水芳裕、下川賢司、白石耕治、菅原康夫、瀬戸谷浩、善端直、高畑知功、田代弘、田中清美、谷内碩央、谷口恭子、谷口徹、谷本進、田畑基、近澤豊明、辻範学、辻本和美、土山公仁、中井正幸、中川義隆、中澤勝、中島皆夫、中司照世、中村貞史、中屋克彦、賛元洋、西口壽生、新田剛、新田洋、根鈴輝雄、野口美幸、野島稔、橋爪康至、橋本高明、伴野幸一、樋口隆久、樋口吉文、久田正弘、菱田淳子、平井泰男、平川誠、福田昭、福田哲也、藤田三郎、藤本英策、松井忠春、松本秀人、三宅弘、水谷壽克、宮腰健司、宮崎幹也、宮成良佐、村田裕一、安英樹、柳本照男、山本悦世、山元敏裕、行田裕美、義則敏彦、の諸氏に御教示、御援助賜った。作業の性格上、多量の資料を運びだしてくれたり、長時間にわたって収蔵庫でつきあってくれた方が多

い。また谷口徹氏と井上直夫氏は、掲載した写真を撮ってくれた。わたくしは、以上の方々に対して、ここにあらためて深い感謝の意を表する。さらにわたくしのいたらぬ文章に発表の場を作ってくれた石黒立人氏と宮腰健司氏の友情と、紙面を提供してくれた愛知県埋蔵文化財センターの御厚意に対して、心から謝す。 (1994年1月)

註

- (1): 石黒立人「濃尾の弥生中期土器」『第7回東海埋蔵文化研究会 伊勢湾岸の弥生中期をめぐる諸問題』1990年 15・16頁。
- (2): 加賀金沢市戸水B遺跡で出土した甕をみていて、安英樹氏と気づいた。
- (3): 美濃大垣市一本松遺跡出土土器を中井正幸氏にみせていただいた時、ハケメの下に下方向に砂粒が動いた形跡がかなりあるのに気づいた。その後石黒立人氏にケズリ⇒ハケメに間違いのない壺を朝日遺跡出土資料でみせていただいた。
- (4): 以後、引用する尾張の報告書は以下の通り。
 (財)愛知県埋蔵文化財センター『大洲遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第18集)1991年。
 (財)愛知県埋蔵文化財センター『阿弥陀寺遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第11集)1990年。
 (財)愛知県埋蔵文化財センター『勝川遺跡IV』(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第29集)1992年。
 (財)愛知県埋蔵文化財センター『町田遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第9集)1989年。
 甚目寺町教育委員会『森南遺跡発掘調査報告書』(甚目寺町文化財調査報告 II)1990年。
- (5): 愛知県教育委員会『朝日遺跡IV (土器図版篇)』1982年でおこなった解説。たとえば、壺のS X 147—437について、甕のS A 011—143について。
- (6): 石黒立人「W系統土器について」『阿弥陀寺遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第11集)1990年 276・277頁。
- (7): 石黒立人「濃尾の弥生中期土器」『第7回東海埋蔵文化研究会 伊勢湾岸の弥生中期をめぐる諸問題』1990年 25頁。
- (8): 石黒立人氏、宮腰健司氏にみせていただいた。
- (9): 兼康保明氏、三宅弘氏、藤本英策氏、伴野幸一氏にみせていただいた。
- 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会「針江南遺跡の調査」『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要』(国道161号線バイパス関連遺跡調査概要(昭和58年度)4)1984年。
- 滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『服部遺跡発掘調査報告書II——滋賀県守山市服部町所在——』1986年。
- (10): 可見光生氏にみせていただいた。
- 美濃加茂市教育委員会『牧野小山遺跡——県道七宗可児先道路工事埋蔵文化財調査報告書』1973年。
- (11): 石黒立人氏にみせていただいた。
- (12): 新田洋氏、野口美幸氏にみせていただいた。
- 三重県教育委員会・日本道路公団名古屋支社『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(三重県埋蔵文化財調査報告 5)1970年。

三重県教育委員会「花ノ木(山崎)遺跡(28)」『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告——第1分冊——』(三重県埋蔵文化財調査報告 87—1)1989年。

(13): 根鈴照雄氏にみせていただいた。

(14): 平川誠氏、谷口恭子氏、中川義隆氏にみせていただいた。

鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団『岩吉遺跡 III 中小河川改修事業大井手川改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査』(鳥取市文化財報告書 30)1991年。

郡家町教育委員会『万代寺遺跡発掘調査報告書』1983年。

(15): 行田裕美氏にみせていただいた。

津山市教育委員会『京免・竹ノ下遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第11集)1982年。

津山市教育委員会『一貫西遺跡——津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告3』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第33集)1990年。

津山市教育委員会『西吉田遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第17集)1985年。

津山市教育委員会『金井別所遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第25集)1988年。

(16): 山本悦世氏、高畑知功氏、平井泰男氏にみせていただいた。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『鹿田遺跡I』(岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊)1988年。

岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 51)1982年。

(17): 篠宮正氏、義則敏彦氏、加古千恵子氏、菱田淳子氏、秋枝芳氏にみせていただいた。

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所・赤穂市教育委員会『周世入相遺跡——県道高雄一有年横尾線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』(兵庫県文化財調査報告書 第70冊)1990年。

新宮・宮内遺跡発掘調査団・新宮町教育委員会『新宮・宮内遺跡発掘調査書 III』1982年。

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所・兵庫県教育委員会『西脇市大垣内遺跡——加古川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』(兵庫県文化財調査報告書 第98冊)1991年。

八幡遺跡調査会『播磨八幡遺跡』1974年。

姫路市教育委員会『八代深田——姫路市八代字深田——』(姫路市文化財調査報告 IV)1977年。

(18): 笹川龍一氏、山元敏裕氏、大山真充氏にみせていただいた。

善通寺市教育委員会『彼ノ宗遺跡 弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』1985年。

高松市教育委員会『久米池南遺跡発掘調査報告書』1989年。

(19): 菅原康夫氏、勝浦康守氏にみせていただいた。

徳島県教育委員会『光勝院寺内遺跡』1984年。
徳島市教育委員会「第三章 名東西都市下水道築造工事に伴う名東遺跡発掘調査概要」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』1 1989年。

徳島市教育委員会・名東遺跡発掘調査委員会『名東遺跡発掘調査概要——名東町2丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査——』1990年。

徳島市教育委員会「Ⅰ、名東遺跡発掘調査概要——老保健施設建設工事に伴う発掘調査——」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』2 1992年。

徳島市教育委員会「Ⅰ、名東遺跡発掘調査概要——名東西都市下水道築造工事に伴う発掘調査——」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』3 1993年。

徳島市教育委員会「Ⅱ、名東遺跡発掘調査概要——宅地造成工事に伴う発掘調査——」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』3 1993年。

徳島市教育委員会「Ⅲ、名東遺跡発掘調査概要——マンション建設工事に伴う発掘調査——」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』3 1993年。

Q0：加古千恵子氏、菱田淳子氏、浦上雅史氏にみせていただいた。

兵庫県教育委員会・兵庫県埋蔵文化財調査事務所『森遺跡』(兵庫県文化財調査報告書 第55冊)1988年。

Q1：水谷壽克氏、松井忠春氏、辻本和美氏、田代弘氏、下川賢司氏、佐藤晃一氏にみせていただいた。

京都府教育庁指導部文化財保護課「橋爪遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1981—2)』1981年。

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『志高遺跡』(京都府遺跡調査報告書 第12冊)1989年。

野田川町教育委員会『寺岡遺跡』(京都府野田川町文化財調査報告 第2集)1988年。

加悦町教育委員会『京都府与謝郡加悦町 須代遺跡 Ⅰ——調査の概要——』(加悦町文化財調査概要7)1988年。

Q2：谷本進氏、田畑基氏、瀬戸谷浩氏にみせていただいた。

八鹿町教育委員会『米里遺跡』(八鹿町文化財発掘調査報告 Ⅲ)1979年。

八鹿町教育委員会『米里古墳群・米里竈跡』(兵庫県八鹿町文化財発掘調査報告書第8集)1989年。

Q3：田代弘氏、近澤豊明氏、加古千恵子氏、菱田淳子氏、清水芳裕氏、松井忠春氏、樋口隆久氏、中澤勝氏にみせていただいた。

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「第1節 興遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第17冊 1992年。

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「1、青野遺跡11・13次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第30冊 1988年。

兵庫県埋蔵文化財調査事務所・兵庫県教育委員会『春日・七日市遺跡(1)——第2分冊——(弥生・古墳時代遺構の調査)——近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査

報告書——』(兵庫県文化財調査報告書 第72—2冊)1990年。

京都大学埋蔵文化財研究センター「京都府美月遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』1983年。

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「1、千代川遺跡第6・7次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第14冊 1985年。

亀岡市教育委員会『千代川遺跡第11次発掘調査報告』(亀岡市文化財調査報告書 第15集)1987年。

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「(3) ケシケ谷遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第10冊 1988年。

Q0：加古千恵子氏、篠宮正氏、奥井哲秀氏、橋爪康至氏、柳本照男氏にみせていただいた。

兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』(兵庫県文化財調査報告書 第16冊)1983年。

兵庫県教育委員会『栄根遺跡』(兵庫県文化財調査報告書 第14冊)1982年。

茨木市教育委員会『昭和62年度 発掘調査概報Ⅰ』1988年。

尼崎市教育委員会『多能遺跡発掘調査報告書』(尼崎市文化財調査報告 第15集)1982年。

豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』(豊中市文化財調査報告第19集)1987年。

Q5：岩崎誠氏、木村泰彦氏、川西宏幸氏、網伸也氏、松本秀人氏にみせていただいた。

長岡京市教育委員会「長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概要 長岡京跡右京第10・28次調査(7ANMMB地区)」『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 1980年。

長岡京市教育委員会・長岡京市発掘調査研究所「第2章 長岡京跡右京第48次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第19冊 1987年。

(財)古代学協会『平安京左京四条三坊十三町——長刀鉾町遺跡——』(平安京跡研究調査報告 第11輯)1984年。

(財)京都市埋蔵文化財研究所「鳥羽離宮跡第71次調査」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』1983年。

松本秀人・石井清司「木津町大島遺跡出土の弥生土器について」『京都考古』第47号 1987年。

城陽市教育委員会「森山遺跡発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』1977年。

Q6：宇治田和生氏、野島稔氏、田中清美氏、石神幸子氏、橋本高明氏、小浜成氏、芋本隆裕氏、辻学氏にみせていただいた。

枚方市教育委員会・田口山遺跡発掘調査団『田口山弥生時代遺跡調査概要報告』(枚方市文化財調査報告 第2集)1970年。

四條畷市教育委員会『雁屋遺跡』1987年。
大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会『加美遺跡

現地説明会資料』1985年。

大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター『城山(その1)——近畿自動車道天理—吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書——』1986年。

大阪府教育委員会『国府遺跡発掘調査概要・Ⅲ——藤井寺市惣社町2丁目所在——』(大阪府文化財調査概要1972—7)1973年。

山本雅晴「河内国府遺跡出土の弥生式土器——土岐出土の土器群の紹介とその製作技術について——」『大阪文化誌』第1巻第3号 1974年。

大阪府教育委員会『川北遺跡発掘調査概要——府立藤井寺養護学校用地内埋蔵文化財調査——』1981年。

瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡Ⅲ』1981年。

大阪府教育委員会『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ——八尾市高美町所在——』1989年。

羽曳野市教育委員会『古市遺跡群X』(羽曳野市埋蔵文化財調査報告書18)1989年。

②7:白石耕治氏、阪田育功氏、樋口吉文氏にみせていただいた。

和泉丘陵内遺跡調査会『池田下遺跡』(和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書Ⅰ)1991年。

四ツ池遺跡調査会『四ツ池遺跡 その6 昭和51年度発掘調査報告書』1977年。

和泉丘陵内遺跡調査会『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅲ』1984年。

②8:中村貞史氏、大野左千夫氏にみせていただいた。

和歌山県教育委員会『和歌山市宇田森遺跡発掘調査概報』1968年。

和歌山県教育委員会『吉田・北田井遺跡 第1次調査概報』1970年。

土井孝之「3 紀伊地域『弥生土器の様式と編年——近畿編Ⅰ——』1989年。

②9:岡内三真氏にみせていただいた。

京都帝国大学『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学報告 第十六冊)1943年。

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ——藤原宮西辺地区・内裏東外郭の調査——』(奈良国立文化財研究所学報 第37冊)1980年。

奈良県史跡名勝天然記念物調査会『宮瀧の遺跡——吉野郡中庄村大字宮瀧出土遺物遺構の調査』(奈良県史跡名勝天然記念物調査会報告 第15冊)1944年。

③0:新田洋氏、門田了三氏にみせていただいた。

三重県教育委員会『Ⅶ 阿山郡大山田村北切遺跡』『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財調査報告 63)1984年。

三重県教育委員会『三重県上野市 下郡遺跡昭和57・58年度の発掘調査——木津川河川敷——』1984年。

名張市教育委員会『名張市安部田 御所垣内遺跡 付編赤坂遺跡』1984年。

名張市遺跡調査会『名張市夏見 下川原遺跡』1986年。

③1:中司照世氏にみせていただいた。

上中町教育委員会『大鳥羽遺跡Ⅰ』(上中町文化財調査報告書 第3集)1984年。

上中町教育委員会『大鳥羽遺跡Ⅱ』(上中町文化財調査報告書 第4集)1985年。

③2:兼康保明氏、三宅弘氏、宮成良佐氏、宮崎幹也氏、谷口徹氏、藤本英策氏、伴野幸一氏にみせていただいた。

滋賀県教育委員会『一般国道161号線(湖北バイパス)建設に伴う今津町内遺跡発掘調査報告書——高田館遺跡——』1991年。

長浜市教育委員会『第8章 大辰巳遺跡(Ⅲ)』『越前塚遺跡Ⅲ・口分田北遺跡Ⅰ・Ⅱ・宮司遺跡Ⅳ・新庄馬場遺跡Ⅰ・大辰巳遺跡Ⅲ』(長浜市埋蔵文化財調査資料 第6集)1987年。

近江町教育委員会『法勝寺遺跡』(近江町文化財調査報告書 第6集)1990年。

彦根市教育委員会『彦根市遺跡分布調査報告書』(彦根市埋蔵文化財発掘調査報告 第10集)1986年。

滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ——滋賀県守山市服部町所在——』1986年。

守山市教育委員会『下之郷遺跡の調査』『守山市文化財調査報告書』第34冊 1987年。

滋賀県教育委員会『高島郡今津町弘川遺跡』『は場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅶ—3』1981年。

守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター『横枕遺跡発掘調査報告書』(守山市文化財調査報告書 第34冊)1989年。

③3:土山公仁氏、中井正幸氏にみせていただいた。

岐阜市教育委員会『日野 2——岐阜市日野土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査』(岐阜市文化財報告1987—2)1987年。

③4:春日井恒氏、新田剛氏、新田洋氏、倉田直純氏、河北秀実氏、野口美幸氏、上村安生氏、福田昭氏にみせていただいた。

四日市市『四日市市史』第2巻 史料編考古Ⅰ 1988年。

四日市市遺跡調査会『上野遺跡』(四日市市遺跡調査会文化財調査報告書Ⅳ)1991年。

三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『Ⅱ 津市大里窪田町 橋垣内遺跡——B地区』『一般国道23号線中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』1990年。

三重県教育委員会『納所遺跡——遺構と遺物——』(三重県埋蔵文化財調査報告 35—1)1980年。

三重県教育委員会『津市河辺町・亀井遺跡』『昭和47年度営園場整備地域埋蔵文化財発掘調査報告 4』(三重県埋蔵文化財調査報告 15)1973年。

三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『鳥居本遺跡』『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告——第3分冊10——』(三重県埋蔵文化財調査報告 87—16)

1991年。

松阪市教育委員会『一般県道田丸停車場斎明線道路改良事業に伴う波瀬B遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財調査報告 104) 1992年。

三重県教育委員会「I 鈴鹿市安塚町 起A遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財発掘調査報告 60) 1983年。

05: 宮腰健司氏、小林久彦氏、賛元洋氏にみせていただいた。

(財) 愛知県埋蔵文化財センター『岡島遺跡』((財) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第14集) 1990年。

(財) 愛知県埋蔵文化財センター『東光寺遺跡』((財) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第42集) 1993年。

(財) 愛知県埋蔵文化財センター『森岡遺跡・淡洲神社遺跡』((財) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第22集) 1991年。

06: 中屋克彦氏、安英樹氏にみせていただいた。

石川県埋蔵文化財センター『金沢市戸水B遺跡——第4・5次調査——』1992年。

07: 善端直氏、谷内碩央氏にみせていただいた。

七尾市教育委員会『細口源田山遺跡——石川県七尾市細口源田山遺跡発掘調査報告書——』1982年。

七尾市教育委員会『藤野遺跡』(七尾市埋蔵文化財発掘調査報告 第13集) 1991年。

羽咋市教育委員会『須田遺跡——柴垣団地営園場整備に伴う緊急発掘調査報告書』1986年。

08: ミガキの方向とその組み合わせ方で地域差があるが、この問題は素通りする。

09: 田代弘氏にみせていただいた。

00: 丹波亀岡市千代川遺跡方形周溝墓2出土の甕のうち観察したものは、ナデを除けば外面の最終調整がケズリで、そのケズリは下方向であった(第26図17、第27図26・27)。この遺跡で出土した壺のうち、搬入品と思われるものを除くと、体部外面のケズリはどれも下方向であった(第15図6、第17図17、第24図7)。外面下方向ケズリの甕は、もし内的変化とすれば壺の調整法で作られたことになるし、もし外的変化とすれば山城や摂津などに倣って甕のケズリの位置を外面にしたことになる。なおケズリの方向はわからないが、綾部市青野遺跡S D87909(第13図2)・舞鶴市桑飼上遺跡で外面ケズリの甕が出土している。あるいは由良川流域にみられる地域色豊かな外面ミガキ・内面ハケメ・ナデの甕も、外面がケズリ⇒ミガキの可能性なしとしない。

千代川遺跡出土例は松井忠春氏・中澤勝氏に、桑飼上遺跡出土例は岸岡貴英氏にみせていただいた。

(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター「1. 千代川遺跡第6・7次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第14冊 1985年。

(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター「1. 青野遺跡11・13次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第30冊

1988年。

(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター『桑飼上遺跡』(京都府遺跡調査報告書 第19冊) 1993年。